

漢字力を向上させるICT活用

— 「わくわく漢字伝」の活用事例から —

光村図書出版株式会社 開発部 藤田 淳子

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/digital/>

キーワード：提示型デジタル教材、漢字学習、デジタルテレビ、電子黒板、ワークシート

1. 漢字学習の現状

近年、「国語力」や「読解力」とともに「漢字力」の低下が取り沙汰されている。小学校で学習する漢字は全1006字。習得には、ひたすら書き取りを行ったりドリルを使ったりして暗記させていくのが早道のようなのだが、児童が苦痛に感じてしまい、漢字嫌いに陥ってしまう場合が多い。また、国語で十分に時間が取れないのも現実である。

一方、漢字の学習は書き取りだけでなく、漢字の三つの要素である「形・音・義」の指導が大切であると言われる。漢字の「字形」、「音や訓」、「意味」には一定のルールがあり、その言葉の面白さに気づくと、習得の度合いや活用する力は確実に高まると考えられている。そこで、ICT活用によって、漢字そのものへの興味を喚起させる内容や活動を効率的に、しかも系統的に提示できないかと考え、「わくわく漢字伝」を開発した(2008年春発売)。ここでは、本ソフトを活用した授業実践と合わせて、ICTを活用した漢字学習の取り組みについて述べたい。

2. 「わくわく漢字伝」について

「わくわく漢字伝」は、一斉学習を想定した提示型ソフトウェアで、すべての教科書の単元に対応している。低・中・高学年の各巻ごとに6～7の単元があり、漢字そのものの面白さに気づかせながら、漢字を正しく活用したり、読みや意味を類推したりする力を身につけられるように配慮されている。児童がより興味をもって学習に取り組めるよう親しみやすいアニメーションを使用。また、確実に学習の定着を図る場面ではワークシートを用意した。さらに、漢字にまつわる写真や「辞典の使い方」(動画)等の参考資料を多数収録している。

3. 授業実践の紹介と活用効果

東京学芸大学附属小金井小学校・片山順也先生による4年「同音異義語」の授業実践を紹介する(写真1)。同じ読みの漢字は同じ意味なのか、先生が問いかけ、児童から「よる(夜/寄る)」「はな(花/鼻)」等の意見を引き出す。その後、「わくわく漢字伝」を提示。「ひ(火/日)」「あける(明ける/空ける/開ける)」という言葉为例に、同音異義語を考えさせた(図1)。ここでは、まず板書や国語辞典、ワークシートと合わせた活動を行い、学習の定着を図る。そして、授業の後半は「漢字なぞかけ遊び」に挑戦。同音異義語を理解しないとできない言葉活動だ。ところが、短時間の授業にも関わらず、同音異義語を用いたなぞかけを見事に作り、全グループが発表することができた。

本時の授業を通してわかったことは、提示型ソフトを活用することで、①漢字学習に対する意欲関心が高まり、②学習内容やイメージの理解が早まり、③学習の定着(習得)が確かなものになったことである。その際、見逃せないことは、ICT活用によって学習情報が共有化されたこと、そしてそのことによって児童が協働化して言語活動に取り組む、漢字の活用を共に楽しむことができたということである。

4. これからの漢字学習

これからの漢字学習においては、漢字への興味・関心をもつこと、「読めた!」「意味がわかった!」という実感、一生使える漢字力を身に付けるということが重要ではないかと考える。暗記・書き取りの反復学習も重要であろう。しかし、今までの漢字学習にICTを加味することにより、漢字を楽しむことを知り、漢字を好きになることで、飛躍的な学習効果が得られるのではないだろうか。今後は、電子黒板+提示型ソフトなどのICT機器と、板書・教科書・ワークシートなどの各メディアとの効果的な連携を意識した新たな漢字学習を提案したいと考えている。



写真1: 「わくわく漢字伝」を活用した授業



図1: 中学年用「同じ読みは同じ意味?」